

西表島・船浮要塞跡の実態と現状

A Discussion of the Funauki Fort Site on Iriomote Island

伊波 直樹 山本 正昭

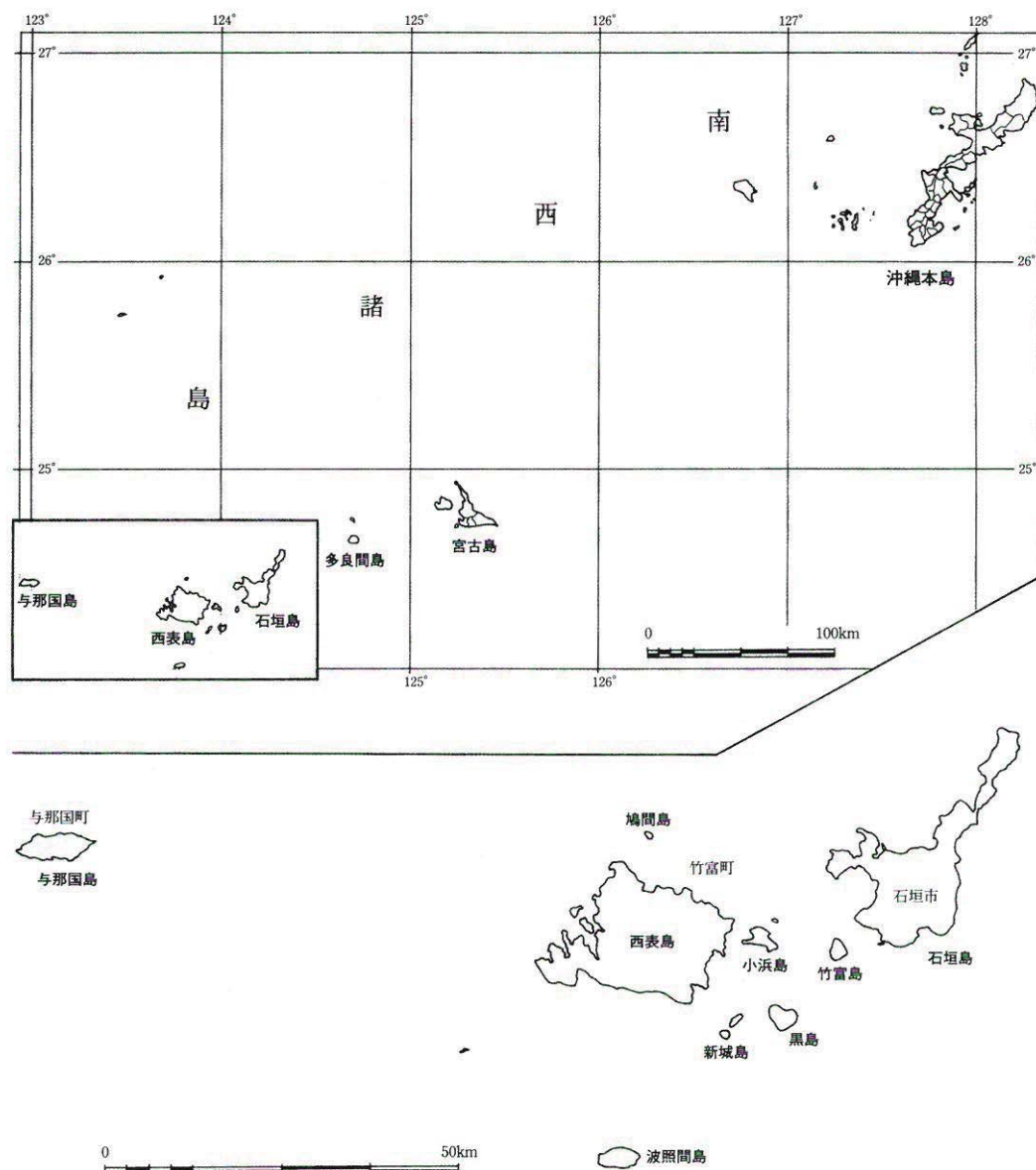
Iha Naoki, Yamamoto Masaaki

ABSTRACT: Remains of a World-War-II fortress still exist around Funauki Bay in the western part of Iriomote Island, Taketomi-cho, Okinawa. The fort was built provisionally in the process of the southern invasion of the Japanese army, and includes batteries, barracks, a hospital, piers, various trenches and facsimile canon. These facilities were built on Fukapanari Island, Uchipanari Island, Saba Point and Sonai Peninsula, and much of their remains are still visible today. Remaining building foundations, battery foundations, powder magazine and partly-collapsed trenches allow us to imagine and reconstruct the original layout and their functions. This paper also refers to the 'Tetsuta Diary', the primary record that describes the fort, and tries to clarify the real condition of the fort both from actual feature remains and from archival records.

1. はじめに

平成10年から開始した国庫補助事業である沖縄県戦争遺跡詳細分布調査事業は今年の3月で事業が終了する。すでに南部編、中部編、北部編、本島周辺離島及び那覇市編、宮古諸島編と5冊の報告書が刊行されており、八重山諸島編の刊行をもって沖縄県内全域の戦争遺跡を網羅したことになる。これまでに約1000箇所の沖縄県内各地の戦争遺跡を取り上げ、そして重要な遺跡に関しては頁を割いて詳細な報告を行ってきた。しかし、戦争遺跡詳細分布調査の実態としては、この事業7ヵ年では不足の感があり、未だ確認されていない戦争遺跡も数多くあることが想定される。また時間的都合から詳細な分析についても限界があり、より詳細な観察および検証を行うとより興味深い成果が得られると感じた戦争遺跡も多くあるという感触を分布調査を通して得た。今回はその中でも報告書内でその詳細について報告しきれなかった西表島の船浮要塞跡について、より詳細な遺構の実態や調査状況、そして検証を行っていきたい。

船浮要塞跡は西表島の西側、現在の祖納、外離島、内離島、サバ崎といった各所に遺構が残る、広域分布といった特徴を示す戦争遺跡群である。東アジアから見た西表島（第1図）は北の日本列島と南の東南アジアを結ぶキーストーン的な位置を占めており、太平洋戦争時において大東亜共栄圏を目指す大日本帝国にとっても無視できない地域であったと思われる。その証拠に1922年（大正11）という段階から船浮に要塞建設計画が立てられていた。この計画はワシントン条約によって頓挫してしまっていたが1941年（昭和16）6月5日、太平洋戦争が開始されるより前に要塞建設が開始されたことから、当該地における要塞設置が重要視されていたことが窺える。实地調査では多くの遺構が確認され、それらを4区に分けて報告したが、調査の実態や更なる遺構の詳細について触れていき、それらを踏まえて要塞施設の比較・検証を最後に行っていく。なお、遺構の詳細については『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査報告書－八重山諸島編－』所収船浮要塞の項目に新たに付け加えたものであり、報告書中の若干の表現の違いはあるものの、内容についてはそれ以上のものではないことを付記しておきたい。



第1図 西表島の位置図

2. 船浮要塞跡の概要

1941年(昭和16)に臨時要塞として建設された船浮要塞は、天然の良港である船浮港を囲むようにして北から祖納半島、外離島、内離島、サバ崎の4管区に設置された軍事施設である。要塞の中核となる司令部は、第1区の内離島に設置、司令官は下永憲次(陸軍大佐)であった。その他重砲兵連隊(隊長・山崎豊吉陸軍少佐)本部、高射砲隊、歩兵隊、陸軍病院も同島に配備された。第2区は祖納半島で、重砲兵連隊の第2中隊(隊長・北村空角中尉)が配備。第3区は外離島で同連隊の第1中隊(隊長・小野藤一中尉)が、第4区はサバ崎でサバ崎守備隊がそれぞれ配備された。要塞の主な任務は南方から石油などの資源を運ぶ艦船の待避・停泊などを守備することであった。

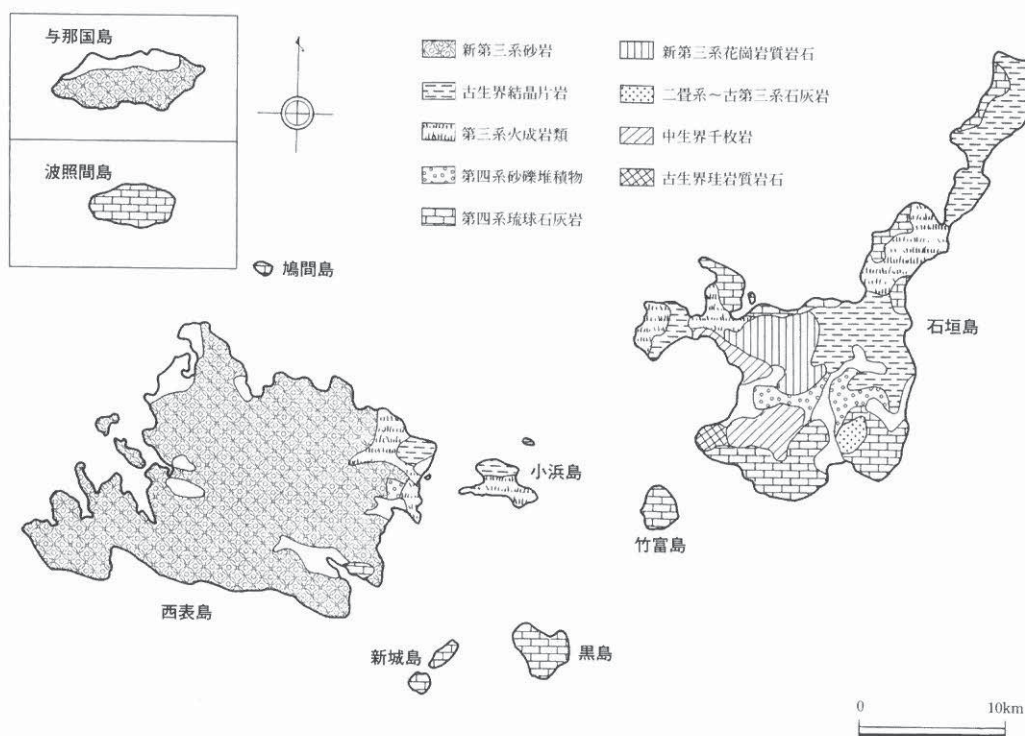
要塞施設は、初期の築営隊による建設作業は約3ヶ月で終了したものの施設は完成しておらず、先述した各部隊が自活をしながら陣地構築を継承し、また地元の住民、児童生徒を動員して約3ヵ年か

けて構築された。しかし、高射砲といった施設は地上に露出、弾薬庫や兵舎なども上空露出のままであり、航空機が主力となった太平洋戦争においてはもはや時代遅れの施設であった。1944年（昭和19）4月1日には、沖縄全島の守備軍・第32軍の指揮下に入り、同年5月8日船浮要塞司令部は解消、同年9月には船浮要塞重砲兵連隊を改称した重砲兵第8連隊は小野隊を残し主力部隊を石垣島に移駐するなど、要塞としての戦略的地位は次第に失われていくこととなった。

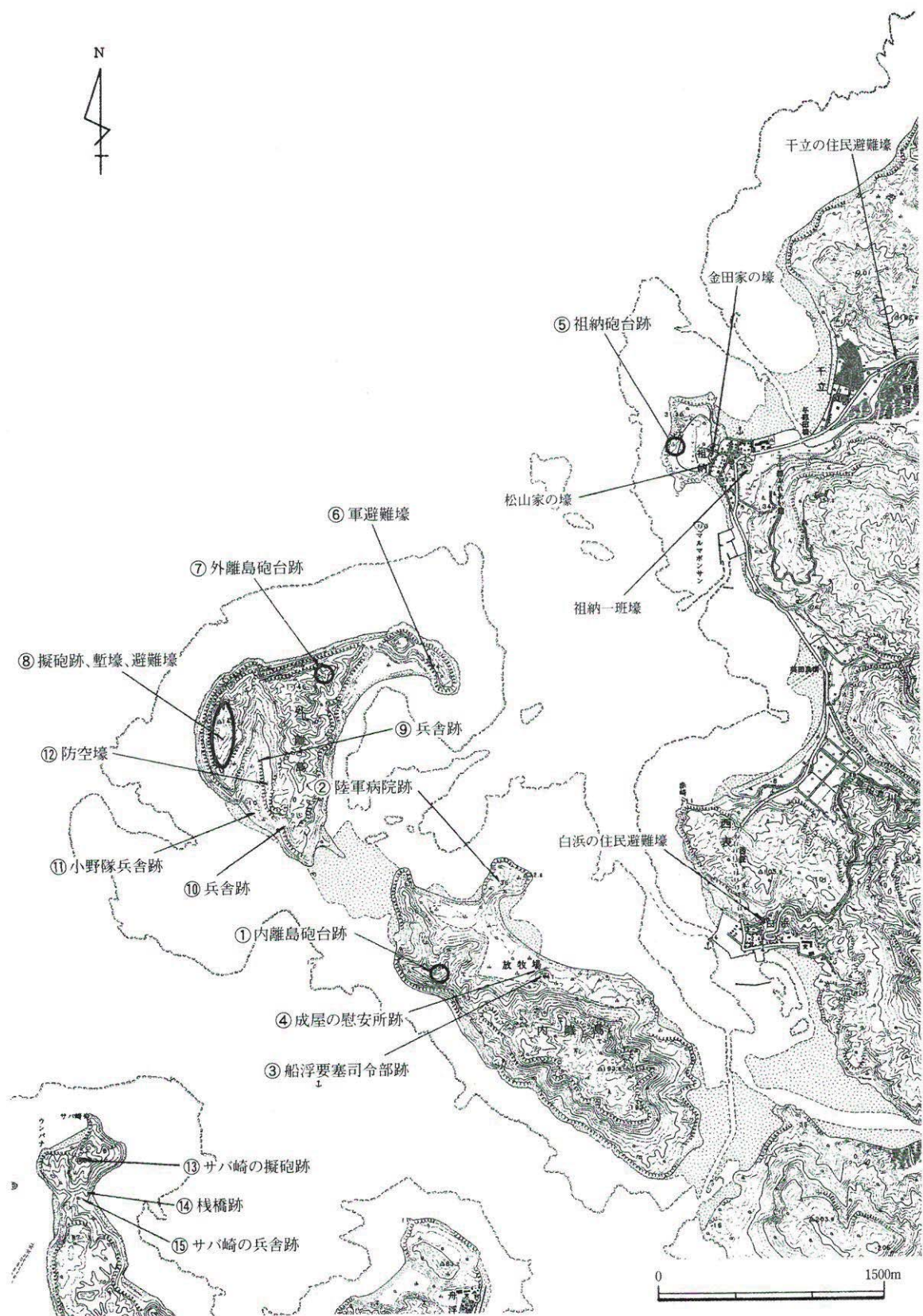
終戦後は要塞内に配備されていた兵隊が復員したことにより、要塞施設は使用されることもなくそのまま放置された。内離島、外離島は戦後約30年間に亘って放牧地として利用され、一部、祖納住民の畑地もつくられていた。現在、外離島の海岸は真珠養殖場として利用されているものの、両島とも島内の自然環境は人の手が加えられておらず、雑木が繁茂した状態である。サバ崎に関しては灯台が建設された以外は特に改変されていないため、自然環境は外離島、内離島と同様である。祖納については周辺に畑地があるが、施設跡は現在竹林が密生している。つまり、先述した地域はいずれも地形改変等が全く行われなかったため、戦時中使用したこれらの施設跡が現在に至るまで、破壊されることなく良好な形で残存している。

今回の調査で特に外離島、内離島、サバ崎は船でしか到達することができない地域で、且つ自然環境が戦時中と比較しても激変していることから、踏査は困難なものであったが、その中で15ヶ所の遺跡（第3図）が確認できたのは大きな成果であったといえる。しかし、時間的な制約も有り、全てを把握することはできなかったため、未だ確認できない戦争遺跡が存在する可能性が高いことを補足しておく。

なお以下の報告では戦時中、船浮要塞で区分されていた4管区の名称を踏襲し、第1区（内離島）から第4区（サバ崎）までの順に、各地域で確認した戦争遺跡を詳細に報告することとする。



第2図 八重山諸島の地質図



第3図 船浮要塞配置図



図版1 1946年4月1日、西表島西部米軍撮影航空写真（沖縄県公文書館蔵）

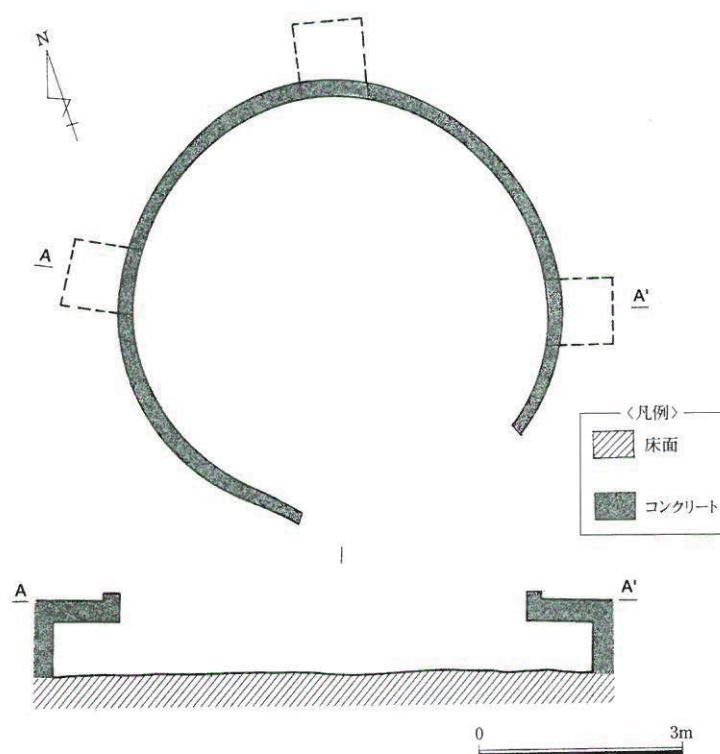
内離島(第1区)

内離島で確認された戦争遺跡は①内離島砲台跡、②陸軍病院跡、③船浮要塞司令部跡、④慰安所跡の4カ所である。

①内離島砲台跡

島の西部に位置する独立丘の頂部に1基残存する(第4図)。砲台跡はコンクリート製の枠が厚さ20cm、高さ120cmで平面形が「C」字状に立ち上げられている。南側の約3mに亘って枠がない部分はおそらく砲門に相当し、その方向は船浮湾に向けられている。内枠は直径約6mで、内壁には弾薬庫を保管する貯蔵穴が3ヶ所見られる。貯蔵穴は幅1m、高さ80cm、奥行1mで3ヶ所とも同規格である。床面にはコンクリートは貼られておらず、直径約5cm~10cm程度の砂岩をバラス状に敷き詰めている。

記録によると戦時中、内離島には斯加式12cm速射カノン砲を2門装備していたとのことだが、今回の調査では当該の1基しか確認できなかった。また、調査に同行していただいた城間良昭氏によると、約20年前は砲台跡がある独立丘一帯は雑木が繁茂した現在とは景観が異なり、ススキに覆われており、砲台跡まで容易に登坂できたとのことである。



第4図 内離島砲台跡

②陸軍病院跡

島の北側には丘陵地形の小半島があり、その突端部付近に陸軍病院が建っていた。周辺地形は西側を除き急崖もしくは急斜面であるが、病院跡一帯はある程度面積を有した平地が確認できる(図版2-2)。平地には建物の基礎枠と思われるブロック片が散乱し、残存する基礎枠も一部しか見られない

ため当時の建物の規模などを把握することはできなかった。ブロックの材質は砂岩を芯にして周囲にサンゴ石を含んだコンクリートで形成されている。

陸軍病院は1941年（昭和16）10月5日、大阪陸軍病院において編成され、同月13日内離島に上陸した。病院は配備されると要塞指令部の指揮下に入り、内離島を拠点に連帯医務室を祖納に置き、隊付軍医は各隊を巡回した。陸軍病院は重砲兵第8連隊と同様に1944年（昭和19）9月、独立混成第45旅団の命令により、一部を西表に残し、主力は石垣島に移動。石垣島では石垣国民学校（現・石垣小学校）に病院を開設し、診療活動に入ったが、後に空襲が激しくなると、於茂登岳の山中に移り診療を行ったという。

③船浮要塞司令部跡

島の北側に位置する旧成屋村地域には戦時中、船浮要塞司令部が配備されていた。今回の調査で旧成屋村地域を踏査したところ、建物跡の痕跡は確認できなかったが、南側にある独立丘（通称・成屋山）の頂上付近には擬砲跡が3ヶ所確認できた。擬砲跡はいずれも地面を掘り込み、3ヶ所のうち1ヶ所は円形、残り2ヶ所はドーナツ状となっている（図版2-3）。擬砲跡の規模は直径約3m～3.5m、深さ約0.8m～1.2mである。そして擬砲の円から南側に掘り込みが一直線状に伸びているのが3ヶ所に共通している特徴である。

④慰安所跡

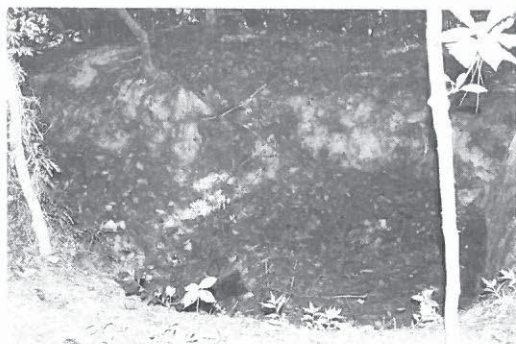
旧成屋村地域には戦時中、要塞司令部の他に慰安所も設置されていた。慰安所跡は先述した擬砲跡がある独立丘から北西側の海岸に近い平地に見られる。雑木等が繁茂した慰安所跡は建物の基礎枠は残存せず、コンクリートとレンガ片が散乱しているが、五右衛門風呂と思われるレンガ製の遺構が現在でも残る（図版2-4）。慰安所跡の周辺には戦時中にコンクリートに構築し直したと思われる井戸跡も見ることができる。



1



2



3



4

図版2 内離島（第1区）の戦争遺跡群

1. 高射砲跡コンクリート枠 2. 陸軍病院跡 3. 司令部周辺の擬砲跡 4. 慰安所跡

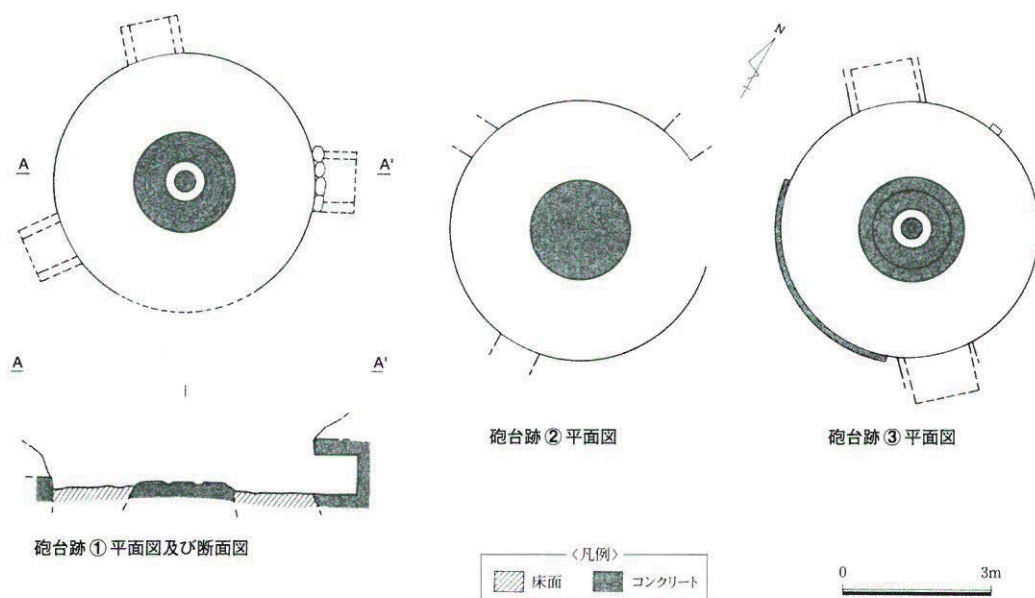
祖納半島（第2区）

祖納半島の西端部に位置する丘陵には祖納砲台跡が4基確認されている。上村と呼ばれる同地域は戦前、畑作地として利用されていたが、要塞建設に際して旧陸軍省は私有地を強制的に接收。建設用地には監視兵を配備し、住民の立ち入りを禁止した。

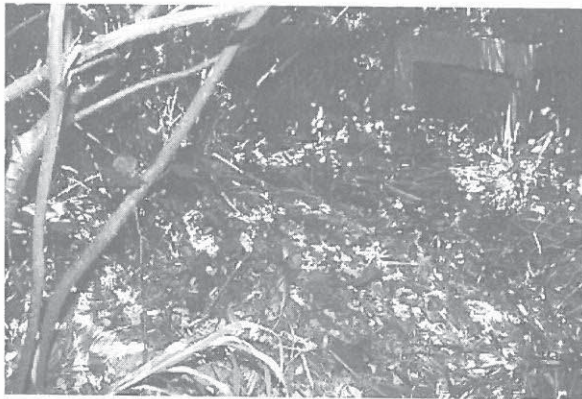
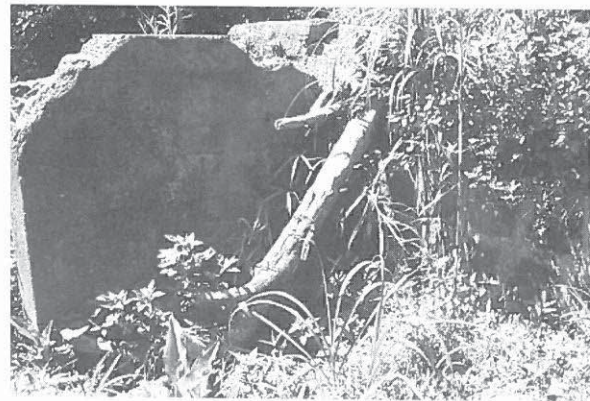
⑤祖納砲台跡

祖納砲台跡は現在、周辺の畑作地から外れた竹及びアダン等が密生した原野になっている。4基の砲台跡が南北に並び、いずれもコンクリートで円形の外枠を造り、その直径が5.2mと共通している。砲台跡①は弾薬庫を保管する貯蔵穴を3ヶ所所有している（図版3-1）。貯蔵穴は幅、高さは80cm、奥行は90cmで、3ヶ所とも同規格である。枠の内部には円形で直径2mのコンクリート製の砲座跡が見られる。砲座の中心には重砲を設置できるように直径15cmの穴が開けられている。また、外枠の上に土留のために砂岩の石積みを構築している。砲台跡②は①と同様、貯蔵穴を3ヶ所所有し、内部の砲座も土砂が堆積しているものの、構造は①と同様である（図版3-3）。①と異なる点は外枠の下に排水溝が見られる事である。砲台跡③、④は貯蔵穴が2ヶ所で、対角線上に位置している（図版3-4）。貯蔵穴の規模は幅120cm、高さ85cm、奥行95cmで全て共通している。内部の砲座は規模、構造共に①と同様であるが、③の砲座はコンクリートの下に砂岩を円形に加工して、①よりも砲座の部分が盛り上がっている、また、②と同様に外枠の下に排水溝が走っている。④に関してはアダンの密生が特に著しく、内部には土砂が堆積して貯蔵穴が半分ほど埋没している部分も見られる。

戦時中、祖納には重砲兵連隊の第2中隊（隊長・北村空角中尉）が配備され、38式野砲4門が設置されていた。当該の4ヶ所の砲台跡はそれに相当する。1942年（昭和17）10月、重砲兵連隊は第2区（祖納半島）と第4区（サバ崎）の全部隊を外離島に集結させたため、以降、祖納に設置された砲台は使用されたのかは不明である。砲台①のすぐ東側には、砂岩をブロック状に加工し、コンクリートを繋いで積み上げた建物跡（図版3-2、用途不明）や、側壁を砂岩ブロックで構築した塹壕と思われる掘り込みを見ることができる。



第5図 祖納砲台跡



図版3 祖納半島（第2区）の戦争遺跡群

1. 高射砲跡①全景 2. 高射砲跡①近くの建物跡 3. 高射砲跡②全景 4. 高射砲跡③コンクリート基礎

外離島（第3区）

7ヶ所の戦争遺跡を確認できた。特に島の南部に位置するV字谷地形一帯には⑪小野隊兵舎跡をはじめ、5ヶ所の戦争遺跡が点在している（図版4-1、2）。管区内で最も外洋に近い外離島は4管区の戦争遺跡でより実戦向きの陣地を構築していること、先述した重砲兵連隊の全部隊を外離島に集結させたことなどから、要塞地域の最前線として戦略的に重要視していたことを窺うことができる。

⑥軍避難壕

島の北東部に位置する独立丘（通称・ボウシ山）の中腹に戦時中、旧日本軍の避難壕として利用された自然壕が現在も残る。壕は砂岩が侵食されてできた大規模なガマで、南西に開口する。幅は約25m、高さは約3m弱、奥行約3mをそれぞれ測る。ガマの内部は砂が堆積しており、加工痕は特に見られなかった。ガマの入口前には軍が構築したと思われる土留の石積みが見られる。

⑦外離島砲台跡

島北部の山間部に位置し、2基確認されている。砲台跡の北側は海岸からすぐ2段階に発達した急崖地形が続いている。砲台跡①は祖納砲台跡と同様コンクリートで円形の外枠を造り、外枠の直径は5.2mと共通している。異なる点は2ヶ所の貯蔵穴が外枠から外れた位置に造られていることである。貯蔵穴は対角線上に位置し、幅80cm、高さ75cm、奥行85cmで2ヶ所とも同規格である。内部の砲座は直径2.8mと祖納砲台跡よりも規模が大きく、砲座の外枠がはっきり確認できる。砲台跡①から南

西約50mの位置に砲台跡②が残存する。砲台跡の外枠は規格、構造とも①と同様であるが、外側に設置されている2ヶ所の貯蔵穴の周囲にも砂岩ブロックにコンクリートを流した石積みを施し、平面形で「C」字状に構築している。貯蔵穴の規格は砲台跡①と同様であるが、対角線上に配していない。また、貯蔵穴を囲う石積みから北向きに塹壕が走っている。

戦時中、外離島には斯加式12cm速射カノン砲を2門設置しており、当該の砲台跡はそれに相当する。砲台跡①の北東側約30mの位置には、砂岩ブロックをコンクリートで繋いだ石積みで通路を構築している。西向きに開口する入口を造り、内部の通路は平面形で逆「L」字状となっている。石積みの高さは1m～1.2mで推移している。しかし、この構造物の用途については今回の調査で明らかにすることはできなかった（図版4-3）。

⑧擬砲跡、塹壕、避難壕

島の西部は海岸、内陸から2段階に発達した急崖地形となっており、その急崖の頂部は標高約100m～140mの緩やかな山岳地形となっている。その山岳一帯から先述したV字谷地形の東側（内陸側）斜面にかけて擬砲跡が4ヶ所、塹壕・タコ壺が1ヶ所ずつ、避難壕が2ヶ所確認できた。

擬砲跡は当該地の中で北側に位置し、南北方向に4ヶ所並列している。内離島にある擬砲跡と同様、地面を掘り込み、内部は円形とドーナツ状に分かれる。直径は約3.2m～3.8m、深さは約50cm～60cm程である。そして、擬砲の円から一直線状の掘り込みが伸びているのも内離島の擬砲跡と同様である。擬砲跡の南側にも塹壕とタコ壺が1ヶ所ずつ残存している。

山岳地域の南端部には人工壕①が残存する。人工壕①は南北方向に連なる尾根部の南端に位置し、3ヶ所の開口部から平面形で「T」字状に掘り込まれている（図版4-8）。開口部は土砂が堆積し、内部も天井が崩落している箇所も見られる。東西に貫通する通路が幅約1.2m、長さが約10m弱である。「T」字の交差する部分の天井には垂直に貫通する円形の堅穴が見られる。当該壕は西から東方向まで一望に見渡せる箇所に設置していることから、監視を目的とした陣地壕の可能性も考えられる。人工壕②は当該地域の東側斜面に残存する。壕は開口部前から地面を掘り込んだ塹壕を有している。塹壕は西向きから途中北西方向に折れながら約10mに亘って続き、開口部に至る。壕は砂岩に一直線状に掘り込まれ、南東方向に開口する。入口部分がやや埋没するが、残存状況は概ね良好である。幅約1.6m、高さ約1.3m、奥行は約6.5mをそれぞれ測る。内部の側壁には部材痕がはっきりと見ることができる。人工壕②の周辺、つまり先述したV字谷地形の東側（内陸側）斜面には土留の石積みが2ヶ所、または傾斜がきつい斜面を往来しやすくするための道路跡も確認されている。

⑨・⑩兵舎跡、⑪小野隊兵舎跡

島の南部、3ヶ所の地域に戦時中、兵舎として使用された建物基礎が現在も残る。⑨の兵舎跡はV字谷の西側（内陸側）斜面の中腹に2棟確認できた（図版4-4）。2棟の兵舎跡は南北に約30mの距離に位置し、斜面が連続している当該地にわずかに残る平場をある程度造成して設置したと想定される。兵舎跡は2ヶ所ともに長方形で出入口と思われる階段跡を見ることができる。

⑩の兵舎跡は島の南端部、急崖地形の上部に1棟確認できる（図版4-5）。現在は雑木に覆われているが、兵舎跡の南側は急崖が迫っており、先述した人工壕①と同様に西方向から東方向まで一望に見渡せる位置に設置されている。兵舎跡は東西に長い長方形で、南北に約6m、東西に約12m、基礎枠の幅は約30cmである。兵舎には約1.4m四方の幅で入口跡も北側に付設されている。なお⑨、⑩の兵舎跡は今回の調査で初めて確認された戦争遺跡であるが、1942年（昭和17）10月に重砲兵連隊の

全部隊を外離島に集結させていることから、外離島に駐屯した小野隊が構築した兵舎かは不明である。

⑪の小野隊兵舎跡は戦時中、重砲兵連隊の第1中隊（隊長・小野藤一）の兵舎として利用した建物跡である。小野隊兵舎跡は島の南部に位置するV字谷の平野部、海岸付近に2棟残存し、建物跡や隣接するトイレ跡の規模などから下士官と上官クラスとの兵舎に分類される。

下士官で使用された兵舎は北西－南東方向に長方形で設置されており、長辺部が約30m、短辺部が約6.4mである。建物の内部は長辺部、短辺部の中心に通路を十字につくり、面積が同等の4ヶ所の部屋を有している。通路の幅は長辺部が約1.6m、短辺部が約2mで、建物の基礎枠の幅は30cmで統一されている。兵舎の周辺にはトイレ跡（図版4－6）や井戸跡（図版4－7）も付設している。トイレ跡は兵舎跡の北東側約10mに位置し、兵舎跡の方向と並列している。トイレは通路を中心に左右対称に便器を6ヶ所ずつ設置しているが、アダンの密生が著しく計測等を行うことができなかった。井戸跡はトイレ跡の南東に位置する。コンクリートで構築された直径約1mの井戸と井戸を囲う方形の基礎枠が残り、基礎枠の四隅には柱跡も見られる。また、トイレ跡の東側には砂岩を利用した土留の石積みが一部残存している。

下士官の兵舎跡から南東約50mの位置に上官クラスの兵舎跡が残存する。兵舎跡は北西－南東方向に長方形で設置されており、長辺部が約13m、短辺部が約6.5mである。建物の内部は面積の異なる4ヶ所の部屋を有している。兵舎跡の北西側にはトイレ跡も隣接している。トイレ跡はL字形で便器を1ヶ所設置し、排泄物を溜め込む枠も付設している。内部にはビール瓶などの遺物が散乱している。

小野隊兵舎跡が設置された当該地は、外離島にわずかに残る平坦地を利用している。周辺地形は船浮湾を望める海岸とV字谷地形の急崖地に囲まれていることから、外敵に発見されにくい当該地は駐屯地として外離島で最も適した場所である。戦時中は当該地を拠点に訓練、陣地構築などの軍事活動を島の各地で行っていた。

⑫防空壕

島の南部に位置するV字谷の西側（内陸側）斜面に戦時中、防空壕として利用された人工の壕が残存する。壕は砂岩が露頭した箇所に掘られ、南向きに開口する。入口前は砂岩のガマ状になっているが、自然に侵食されたかあるいは人工的に構築したかは不明である。また、入口前には戦時中使用されたと思われる鉄鍋やヤカンが放置されている。入口はコンクリートで側壁、天井を階段状に枠を構築し、幅、高さともに約2mを測る。内部は入口付近の床面（コンクリート製）が一部崩落し、崩落した下部から垂直に埋め込まれた木材片が露出している。壕内部は時間的な制限もあり、実測等の調査を行うことができず、位置の確認のみに留まった。内部は目測ではあるが広く、途中で北西方向にカーブしているのが見て取れる。

当該の防空壕も今回の調査で初めて確認された戦争遺跡である。『竹富町史 第十二巻 戦争体験記録』によると戦時中、西表島の干立・祖納・白浜・船浮・網取・崎山集落（現在、網取・崎山は廃村）の住民は旧日本軍の奉仕作業として外離島に渡り、壕掘り作業などを行ったという証言が複数記載されており、当該の防空壕が証言に相当する壕の可能性も考えられる。当該の防空壕は今後、壕内部の実測や証言者への聞き取りなど、詳細な調査が求められる重要な戦争遺跡といえる。



1



2



3



4



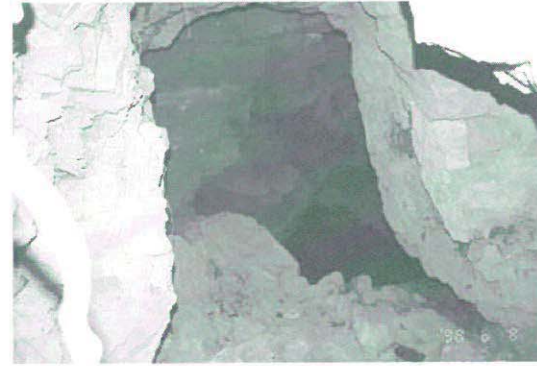
5



6



7



8

図版4 外離島の戦争遺跡群

1. 外離島南部遠景（南東から） 2. 小野隊兵舎跡遠景（南から） 3. 高射砲跡近くの建物跡
4. 兵舎跡⑨ 5. 兵舎跡⑩ 6. 小野隊兵舎跡（トイレ跡） 7. 小野隊兵舎跡（井戸跡）
8. 避難壕内部（人工壕①）

サバ崎（第4区）

サバ崎一帯は現在、灯台のみが設置されており、殆ど人の出入りはない状況である。確認された戦争遺跡は⑬擬砲跡、⑭栈橋跡、⑮兵舎跡の3ヶ所である。記録によると戦時中、サバ崎には38式野砲が2門設置されたとのことだが、他の3管区の施設と比較しても戦略的な重要度が低い印象は否めない。しかし、栈橋跡などサバ崎以外で見ることができない戦争遺跡も残存し、他の3管区の戦争遺跡とは異なる特徴を備えている。

⑬擬砲跡

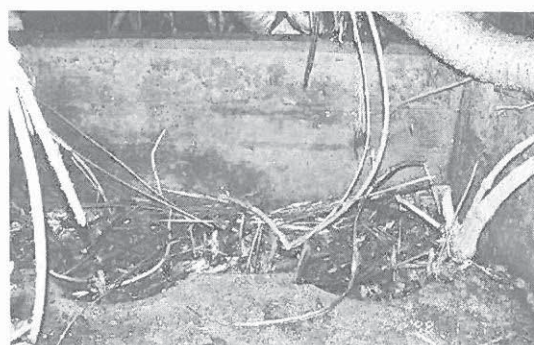
現在のサバ崎灯台の後背部（南部）に立地する丘陵の中腹に擬砲跡が2ヶ所確認できた。擬砲跡一帯はススキに覆われており、判別は困難であった。2ヶ所の擬砲跡は円形とドーナツ状にそれぞれ掘り込まれ、円形の擬砲跡が標高の高い位置に設置されている。擬砲跡の規模は直径約3m～3.4m、深さ約50cmを測る。擬砲の円から一直線状の掘り込みの方向は内離島、外離島の擬砲跡と同様共通している。

⑭栈橋跡

先述した擬砲跡が設置されている丘陵の南側は若干であるが平地が見られる。その東側の海岸に戦時中、栈橋として利用された基礎部分の石積みが残存する（図版5-1）。栈橋跡は干潮時にのみ確認することができる。幅は約3mで北西方向に伸びており、石積みは砂岩の切石を使用している。栈橋跡の付け根部分には海岸に埋め込まれた突起物が2ヶ所見られ、突起物は金属製と木製に分かれる。戦時中、要塞地域の各管区を往来する手段は、船舶以外の方法はなく、各管区の海岸には船舶を停泊するための栈橋を築いていた。しかし、今回の調査ではサバ崎以外に栈橋跡は確認することはできず、その意味では貴重な戦争遺跡といえる。



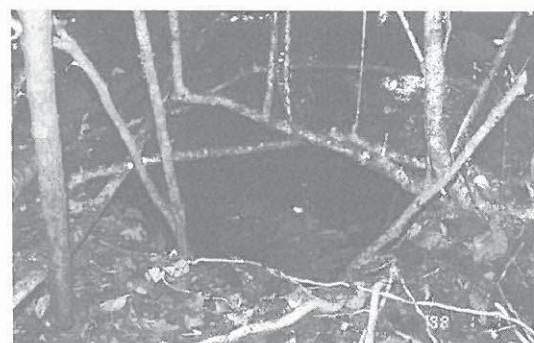
1



2



3



4

図版5 サバ崎（第4区）の戦争遺跡群

1. 栈橋跡全景 2. 兵舎跡（トイレ跡） 3. 兵舎跡周辺（土留め石積み） 4. 井戸跡

⑮兵舎跡

栈橋跡から南東に位置する平地には戦時中、サバ崎守備隊が使用していた兵舎跡が現在も残る。サバ崎の兵舎跡は基礎枠の列の一部が残存している箇所が点在し、コンクリートが散乱している状況も見られる。兵舎跡一帯はアダンの密生が特に著しく、建物全体の形状、あるいは何棟設置されていたのか正確に把握することはできなかった。しかし、兵舎跡に隣接するトイレ跡はほぼ完形で残存している（図版5-2）。トイレ跡は一辺3.8mの正方形で東側に出入口の床面が見られる。内部は中心を通路が東西方向に走り、北側は大便所4ヶ所、南側は大便所2ヶ所と小便所3ヶ所が設置されている。その他兵舎跡の周辺には砂岩を粗く加工した土留の石積み（図版5-3）や、井戸跡と思われる方形のコンクリート枠、そして円形のコンクリート枠（図版5-4）も見ることができ、位置関係まで把握することができた。

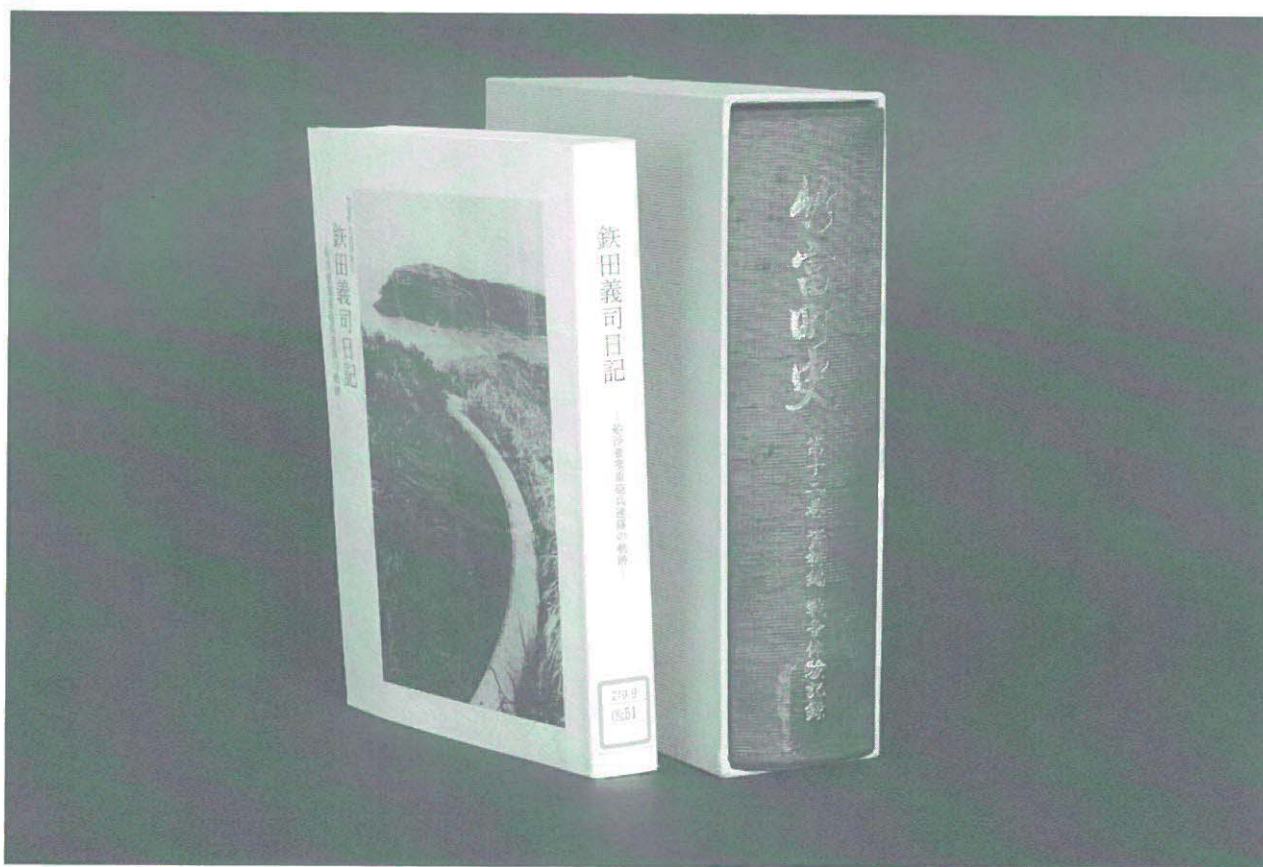
3. 船浮要塞の考察方法

（1） 文献資料から見る船浮要塞

今回の分布調査で得られた成果を検証・考察する方法としてはやはり、文献資料からのアプローチは欠かせないものである。そこで、船浮要塞を考察していく上で使用する文献資料として下記の2冊（図版6）を掲げる。

竹富町町史編集室『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場 1996

竹富町町史編集室『竹富町史資料集① 鉄田義司日記－船浮要塞重砲兵連隊の軌跡－』竹富町役場2000



図版6 竹富町町史編集室刊行の沖縄戦関連資料

上記した2冊の文献資料は戦時中の船浮要塞に駐屯した軍人と、要塞の陣地構築等に関わった戦時下の住民から見た視点を収集・記録した地域の貴重な資料である。特に『竹富町史資料集① 鉄田義司日記—船浮要塞重砲兵連隊の軌跡—』（以下、『鉄田日記』）は船浮要塞重砲兵連隊の陸軍少尉として配属された鉄田義司氏（図版7）が1941年(昭和16)から1945年(昭和20)までにわたり、軍事を中心とした日常的な生活や連隊の動向等を記しており、船浮要塞の状況、戦略が変化していく過程を把握できる内容となっている。一軍人の視点から見た船浮要塞に関する同時代資料といえる。今回、分布調査の成果を『鉄田日記』の記述を中心に考察していくが、その前に簡単ではあるが『鉄田日記』が公開に至るまでの経緯を紹介する。

戦後40年余、鉄田氏自身が保管していた『鉄田日記』は1986年（昭和61）当時、竹富町立白浜小学校教諭として赴任していた城間良昭氏が「西表島の戦争」を調査研究する中で、『鉄田日記』の所在を突き止め、鉄田氏から借り受け入手した。城間氏はその後、『地域と文化』第40・41号合併号で「船浮に関する手記」の中で『鉄田日記』の一部概要を発表している。

鉄田氏から日記の発刊を約束され、城間氏が7年余り保管していたが、竹富町史編集室が『鉄田日記』を城間氏が保管しているとの情報を聞き、城間氏と相談し『鉄田日記』や当時の写真等を譲り受けた。そして町史編集委員会では発刊に向けての審議が重ねられ、「竹富町史資料集」の第1弾刊行物として2000年（平成12）に発行した。

鉄田氏が船浮要塞に来駐した1941年（昭和16）10月から船浮要塞重砲兵連隊を改称した重砲兵第8連隊の1中隊長として石垣島に移駐する1944年（昭和19）9月までの約3年間の記述をもとに、今回の分布調査で確認した各遺構がどう照合し、さらに船浮要塞の戦略が3年間で変化していく中での各遺構の位置付けを考察していきたいと思う。



図版7 鉄田義司氏（『鉄田日記』より引用）

（2） 要塞建設初期に構築したと思われる遺構

船浮要塞は1941年（昭和16）8月中旬から10月末まで築営隊による陣地構築作業が行われ、その後、要塞司令部、重砲兵連隊、陸軍病院など要塞としての体制をなす施設が各管区に配備されていく。各部隊の陣地構築はその後も継続されていくが、要塞建設初期の段階で構築したと思われる遺構は内離島が①内離島砲台跡、②陸軍病院跡、祖納半島は⑤祖納砲台跡、外離島が⑦外離島砲台跡、⑪小野隊兵舎跡、サバ崎が⑭栈橋跡、⑮サバ崎兵舎跡の7カ所である。遺構の種別で見ると砲台が3カ所、兵舎を含む建物が3カ所、栈橋が1カ所に分類できる。3カ所の砲台は内離島が1カ所しか確認できなかったのを除き『鉄田日記』の記述通り配置している。建物においては陸軍病院跡は要塞の体制をなす上で欠かせない施設であり、外離島の⑪小野隊兵舎跡、サバ崎の⑮サバ崎兵舎跡は管区内の陣地構

築・軍事教練を活動していく拠点となる施設であるため、いずれも要塞建設の初期段階で構築されていると思われる。また、サバ崎の⑭栈橋跡も各管区を移動する船舶の停留地となるため、やはり初期段階で構築されている可能性が高い。

『鉄田日記』から読み取れる船浮要塞の転換点として「1942年（昭和17）8月に重砲兵連隊長が交代（入野大二郎中佐）する。入野連隊長は要塞の施設内を巡視した後、連隊編成の変更を内命した。主な大要は中隊の定員を従来の235人から105人とする。祖納、サバ崎の砲台を撤収し、外離島に集結する。歩兵隊は全て熊本師団に配備する。これらの大要をもとに重砲兵連隊の新編成作業が10月7日～10月11日まで行われ、戦備体制を変更するとともに召集解除者を多数出すこととなった。これらの戦備体制の変更を受けて、外離島には北端に野砲4門陣地と兵舎、南端に野砲2門陣地と兵舎が構築され、探照灯（註1）陣地も外離島に移動した。」とある。

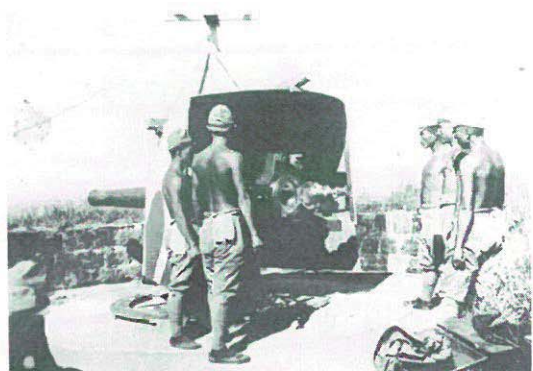
これらの戦備体制の変更により、要塞地域の北端である祖納半島と南端のサバ崎は陣地の防備能力を実質的に無力化し、外離島を防備の中心として要塞全体の防備区域を縮小していることが分かる。



1



2



3



4

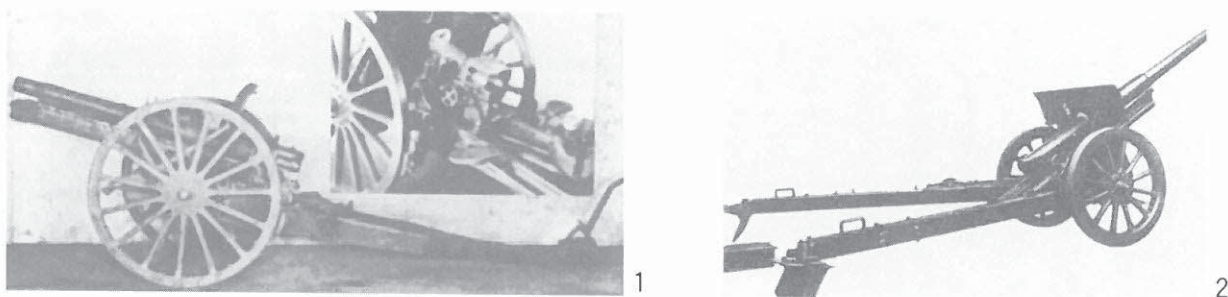
図版8『鉄田日記』（1～3）と米軍撮影航空写真（4）から見た船浮要塞の戦時中、戦争直後の状況
1. 外離島の兵舎か 2. 下永部隊サバ崎兵舎前（昭和16年撮影） 3. 設置された野戦重砲（場所不明）
4. 図版1からの拡大写真 内離島陸軍病院（中央部左下）

* 1・2・3の写真キャプション名は『鉄田日記』内掲載の写真キャプション名と同記

(3) 遺構から見える外離島の防備体制

船浮要塞の防備の中心となった外離島であるが、遺構の種類を見ると、島内の地形に則して陣地の役割をある程度明確にしていることが分かる。

今回の分布調査では外離島に移設したとされる野砲陣地に相当する遺構を確認することができなかった。それは使用された38式野砲（図版9-1）がもともと車輪を付設して移動できるものであり、⑦の外離島砲台跡のようにコンクリートの構築物を造らなくても、地面に固定して使用することができるためである。その場合、野砲を設置して使用した痕跡を現時点で確認することは非常に困難である。しかし、島の南端に野砲2門陣地とともに構築したとされる兵舎は⑩の兵舎跡の可能性が考えられる。⑩の兵舎跡は島の南東側即ちV字形地形尾根部分の突端付近に立地しているため、兵舎周辺の地域は野砲陣地を設置し、機能するための地理的条件を満たしているといえる。



図版9 船浮要塞で使用された兵器と同型器（『日本陸軍便覧』より引用）

1. 38式野砲（1905年製） 2. 10cmカノン砲（1925年製）

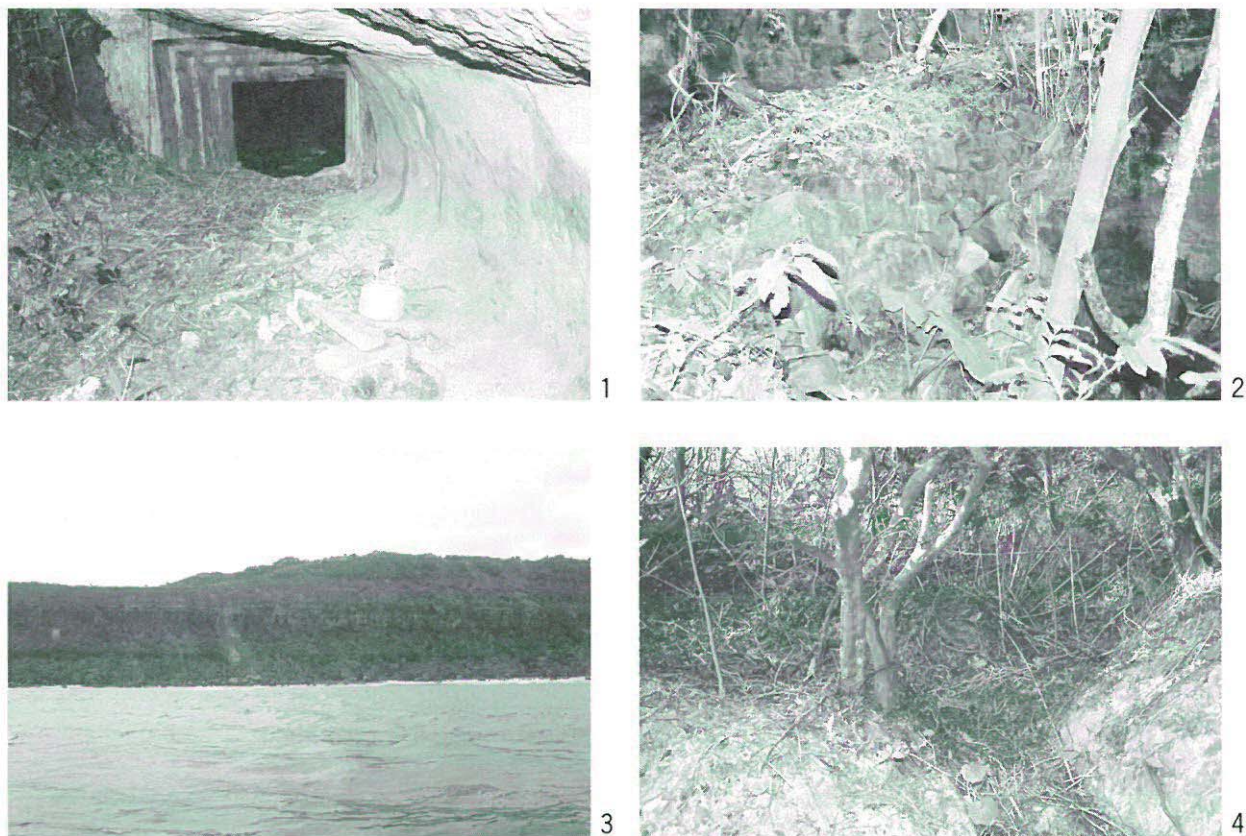
次に急崖地形がほぼ南北方向にかけて続く地域に立地している⑨の兵舎跡と⑫の防空壕（図版10-1）は、立地状況と他の施設との位置関係から見ると、外離島の軍事拠点となる⑪小野隊兵舎跡と、大砲陣地である⑦外離島砲台跡や⑩の兵舎跡等を繋ぐ中継地的な役割を持っていると考えられる。⑫の防空壕は現時点では『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』（以下、『戦争体験記録』）からの記述に相当する壕であるという確定はできないが、証言からは壕の使用状況として、有事の際の避難地的な役割だけではなく、弾薬の保管庫としても利用されており、多面的な役割を持っていることが分かる。

島の北側から西側にかけては標高約100m以上の急崖地形（図版10-3）が続き、その上部に⑦外離島砲台跡、⑧擬砲跡（図版10-4）、塹壕、避難壕が配置されている。外洋を監視・守備できる場所に立地していることから、船浮要塞の最前線としての役割を担っていることが分かる。しかし、その最前線に擬砲が構築されている理由として、『鉄田日記』の記述からある程度読み取ることができる。

「1944年（昭和19）3月に要塞司令官が下永憲次大佐に替わって丸山八束大佐が1日付で就任した。翌日には丸山新司令官は要塞内を初巡視し、弾薬庫、砲台、探照灯陣地の実態を確認。そして、自活農耕の奨励、漁撈の促進、砲台陣地及び探照灯陣地の偽装、偽陣地の設置を奨励。」とある。擬砲の設置を認知したのは1944年（昭和19）という太平洋戦争末期の状況を考えると、戦闘における航空機の役割は船浮要塞においても重要視しており、対空試射の訓練等もすでに実施している。しかし、船浮要塞における擬砲設置の意図は威嚇を主としたものではなく、実際に兵器を装備している大砲陣地が航空機から攻撃を受けないように秘匿することが主な目的ではないかと考えられる。そのことを示す事例として、『戦争体験記録』による複数の記述からある程度読み取ることができる。

1945年（昭和20）頃から西表島西部にも空襲が始まるようになるが、祖納・白浜集落を中心に空襲

が行われているにも関わらず、船浮要塞を守備している部隊は空襲に対しほとんど応戦をしていない。それは前年に重砲兵第8連隊の主力が石垣島に移駐し、引き続き船浮に駐屯していた第1中隊（小野隊）が空襲の際に自陣の発射元を察知されるのを恐れ、隊長命令で応戦することを禁じている。さらに、前年に重砲兵第8連隊の主力が石垣島に移駐する際には、移駐する人員に伴って船浮要塞に装備していた兵器も同時に移設している可能性が高く、船浮要塞は空襲に対応できる状況になかったと想定される。



図版10 外離島の戦争遺跡群

1. ⑫防空壕入口 2. 軍用道路跡の石積み（⑧避難壕近辺） 3. 島西部急崖地形（擬砲跡設置）
4. 擬砲跡

（4） 船浮要塞と住民の関わりを示す戦争遺跡

船浮要塞は1942年（昭和17）頃から、各管区における陣地構築作業を西表島の西部に位置する干立・祖納・白浜・船浮・網取・崎山集落（現在、網取・崎山は廃村）の住民に奉仕作業として動員していた。（竹富町町史編集室1996・2000）また、地元住民だけではなく、炭鉱会社の坑夫も徴用しており、作業の内容は壕の掘削、道路の開削などが主であった。

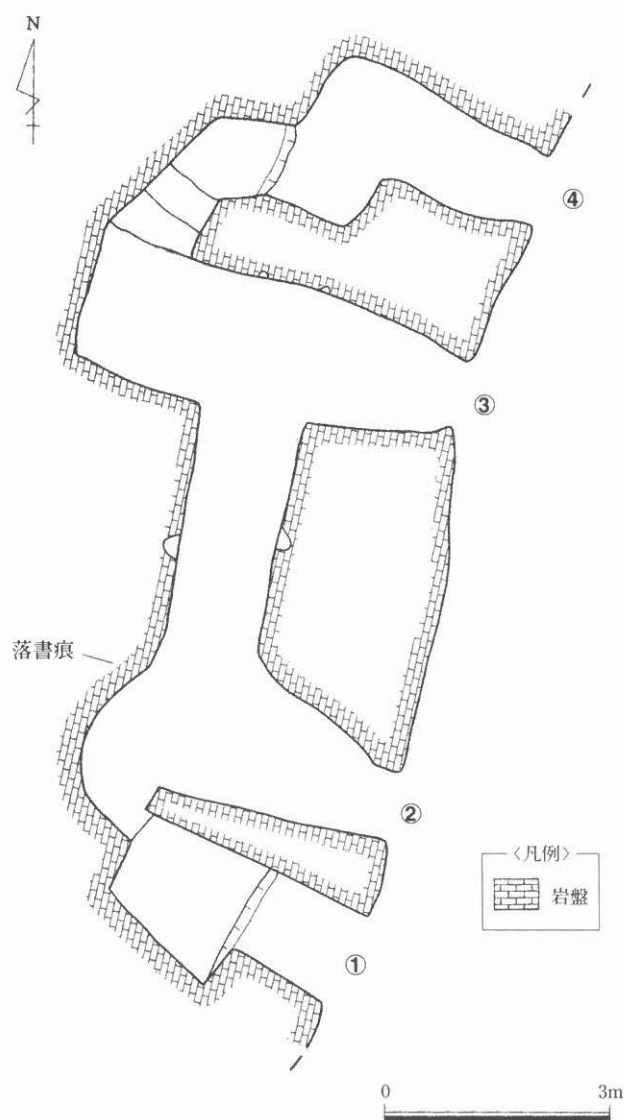
今回の分布調査では人工の住民避難壕が網取・崎山以外の4集落で5カ所確認されている。その内訳は下記の通りである。

- （干立）①—干立集落入口の壕、（祖納）②—金田家の壕、③—松山家の壕、
（白浜）④—白浜の避難壕、（船浮）⑤—船浮の避難壕

上記した5カ所の住民避難壕は全て加工の施しやすい砂岩に掘り込まれており、内部の構造等は異なるものの、壕を構築する際に使用した工具の掘削痕や、壁・天井を補強するために木材等を嵌め込んだと思われる部材痕等が見られ、いずれも丁寧に成形されているのが窺える。また、壕の規模から

集落単位、あるいは集落の班単位で住民を収容できるように、ある程度組織立って壕を構築しているものと想定され、白浜の避難壕（図版11-3）においては住民と炭坑の坑夫が共同で構築したという状況が『戦争体験記録』の記述からも読み取れる。

各集落の住民が戦時に備え、自力で壕を構築している状況を見ると、先述した船浮要塞での奉仕作業等の影響が垣間見える。西表島に点在する集落の中で、先述した集落以外（古見・大原等）は人工の避難壕が確認されていないことから、今回報告した人工の住民避難壕は船浮要塞と地元住民との関わりを示す上で重要な戦争遺跡といえる。



第6図 祖納集落 金田家の壕平面図



1



2



3

図版11 西表島西部の集落に残存する住民避難壕

1. 祖納集落 松山家の壕入口 2. 祖納集落 金田家の壕内部 3. 白浜の避難壕①入口

4. まとめ

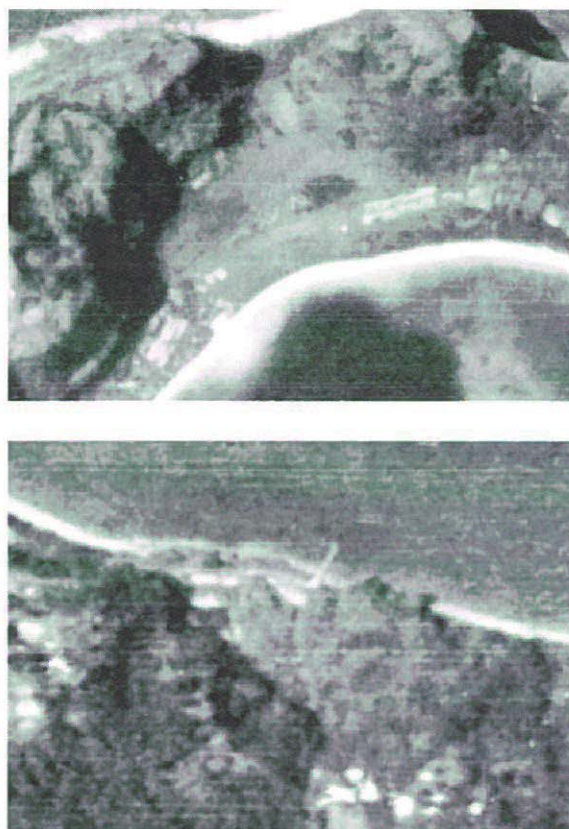
今回、船浮要塞跡についての考察方法で得られた成果をいくつか掲げる。まず、分布調査で確認した船浮要塞の戦争遺跡を文献資料の記述から考察することによって、改めて文献資料の重要性を痛感させられた。船浮要塞の場合、『鉄田日記』という軍人の視点から見た同時代資料を中心に、船浮要塞が建設から終戦までの約4年間で状況、戦略が変化していく過程を踏まえながら、各遺構の位置付けをある程度読み取ることができたのは大きな成果であった。その結果、遺跡、文献資料両方の共通認識と言える事は船浮要塞の戦時における厳しい状況である。それは各遺構の分布状況、種類、性格においても文献の記述の内容からも如実に表れている。

また本来、軍事作戦上、機密性を保持しなければならない要塞施設に地元の住民を陣地構築作業に動員したという事実からも、住民の手を加えてまで軍事活動をせざるを得なかった船浮要塞の状況の厳しさを表している。その地元住民が船浮要塞の陣地構築に関わった影響が、戦時に備え、自力で構築した住民の避難壕の規模・構築状況から見て取れた事も、戦時における船浮要塞の一つの側面を示す上では大きな成果であったといえる。

そして、戦時中に船浮要塞の陣地構築作業に関わった住民の体験が戦後、『戦争体験記録』という文献資料にまとめられ、『鉄田日記』とともに、今回、船浮要塞についての考察を行う上で重要な役割を果たしたことは、調査において地域の資料を十分に活用することができたという意味で非常に意義深い。戦争遺跡の現地調査、研究・考察をする上では、地域の文献資料あるいは地域の研究者、有識者、戦争体験者等からどれだけ情報を得て、御指導・御協力して頂くかによって、その成果というのは大きく変わってくる。船浮要塞についての考察の場合、『鉄田日記』・『戦争体験記録』という地域の優れた文献資料と地域の研究者・有識者等からの手厚い御指導・御協力のおかげで、その考察内容・成果が反映されたと言っても過言ではない。

船浮要塞に関する戦争遺跡から見た今後の課題としてはまず、未だ確認されていない戦争遺跡の確認を地道に続けていく必要性が掲げられる。今回の分布調査では、船浮要塞司令部跡や外離島北側に構築したとされる兵舎跡など、『鉄田日記』等で記載されていた施設を確認することができなかった。また、拡大した米軍の航空写真からも未確認の施設跡（図版12上・下）をいくつか見ることができる。さらに今回で確認した戦争遺跡をより詳細な調査を行うことも、船浮要塞の実態を明確にしていく上で当然ながら必要な作業となる。

それから、今回の船浮要塞についての考察方法では、確認した戦争遺跡を地域の文献資料から主に考



図版12 未確認の戦争遺跡（図版1からの拡大写真）

上：外離島北部 兵舎跡か（写真中央右と左下）
下：内離島 船浮要塞司令部周辺（中央部に見える線が栈橋か）

察していく事に重きを置いたため、船浮要塞と同時期に構築された臨時要塞施設（沖縄本島中城湾要塞等）との比較や、大正期に本格的に整備された要塞施設〔奄美大島瀬戸内町に建設された奄美大島要塞（図版13）、小笠原諸島父島に建設された父島要塞等〕との比較など、船浮要塞が旧日本軍、あるいは太平洋戦争においてどのような位置付けであったのかを大局的に考察する視点が欠けていた事は、筆者の反省材料と同時に今後の課題としたい。

最後に、今回の船浮要塞についての考察では、戦争遺跡から見た船浮要塞の一つの実態を導き出すことができたと思っている。それと同様に、筆者が文献資料を用いて戦争遺跡という考古学的視点を中心に考察したように、他の分野、あるいは研究者から見る視点で船浮要塞を調査・研究することによって、新たな実態、成果を導き出してくれるのではないかという期待も込めたい。そういう意味で、船浮要塞は今後も注目すべきテーマであることを提示し、本報告を締めたい。



図版13 本格的な要塞施設跡（奄美大島要塞）
加計呂麻島 安脚場砲台（弾薬庫）



図版14 『鉄田日記』から 戦時中の船浮要塞

上：要塞陣地の一場面（場所不明） 下：人力による道路開削工事（場所不明）

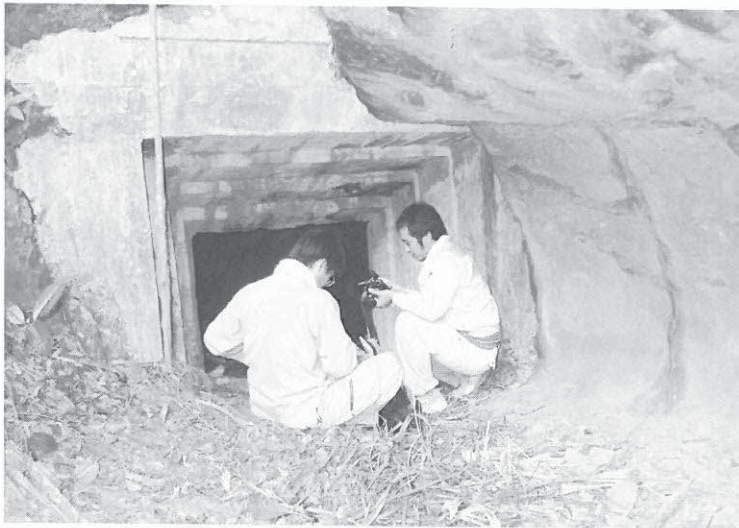


図版15 船浮要塞の調査状況

上：聞き取り調査（白浜公民館にて）

中：調査地への移動（内離島）

下：遺構の伐開状況（内離島砲台跡）



図版16 船浮要塞の調査状況

上：遺構の実測状況（内離島砲台跡）

下：遺構の所見書留（外離島 ⑫防空壕）

謝辞

本稿を作成するにあたって、下記の方々に分布調査の御教示・御協力をして頂いた（敬称略）。城間良昭（沖縄県平和祈念資料館）、通事孝作（竹富町町史編集室）、石垣金星（沖縄県文化財保護指導員）、栗野ユリ（竹富町西表祖納在住）、大田静男（石垣市教育委員会）、仲盛敦（竹富町教育委員会）。また又吉純子をはじめとする埋蔵文化財センター資料整理作業員の方々に図版作成及び文章校正を手伝って頂いた。末文ながら記して謝意を表す。

いは なおき（調査課 臨時的任用専門員）

やまもと まさあき（調査課 専門員）

《註》

- (註1) 自生している松の木等を加工して大砲に見立て、敵の艦船あるいは航空機から大砲が設置されているように見せかけるためのカモフラージュ。
- (註2) 夜間に照射するサーチライトを意味する海軍用語。陸軍では照空灯と呼称。

《参考・引用文献》

- 瀬名波栄『石垣島防衛戦史』先島戦記刊行会 1970
- 沖縄県教育委員会『沖縄県史10 沖縄戦記録2』国書刊行会 1974
- 石垣市史編集室『市民の戦時・体験記録 第一集』石垣市役所 1983
- 沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983
- 石垣市史編集室『市民の戦時・体験記録 第二集』石垣市役所 1984
- 石垣市史編集室『市民の戦時・体験記録 第三集』石垣市役所 1985
- 木崎甲子郎『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社 1985
- 城間良昭「船浮要塞に関する手記」『地域と文化』第40・41合併号 ひるぎ社 1987
- 石垣市史編集室『市民の戦時・体験記録 第四集』石垣市役所 1988
- 大田静男『八重山の戦争』南山舎 1996
- 竹富町史編集室『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場 1996
- 石垣市総務部市史編集室『平和祈念ガイドブック ひびけ平和の鐘』石垣市役所 1996
- 瀬名波栄『太平洋戦争記録 石垣島方面陸海軍作戦』沖縄戦史刊行会 1996
- 八重山戦争マラリア犠牲者追悼祈念誌編集委員会『悲しみをのり越えて—八重山戦争マラリア犠牲者追悼平和祈念誌—』沖縄県生活福祉部援護課 1997
- 米国陸軍省(和訳・菅原完、監修・岩堂憲人、熊谷直、斎木伸夫)『日本陸軍便覧』光人社 1998
- 大城将保「第32軍の沖縄配備と全島要塞化」『沖縄戦研究Ⅱ』沖縄県教育委員会 1999
- 竹富町史編集室編『竹富町史資料集① 鉄田義司日記—船浮要塞重砲兵連隊の軌跡—』竹富町役場 2000
- 沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅰ)—南部編—』2001
- 沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅱ)—中部編—』2002
- 小笠原村教育委員会『小笠原村戦跡調査報告書』2002
- 平凡社『沖縄県の地名』2002
- 菊池実・十菱駿武『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房 2002
- 沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅲ)—北部編—』2003
- 歴史群像特別編集「日本の戦争遺跡」シリーズ『日本の要塞』学習研究社 2003
- 沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅳ)—本島周辺離島及び那覇市編—』2004
- 沖縄県教育庁文化課『沖縄県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書』2004
- 沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅴ)—宮古諸島編—』2005
- 瀬戸内町教育委員会『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』2005
- 沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅵ)—八重山諸島編—』2006